
銀髪の悪魔

辰巳 結愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀髪の悪魔

【Zコード】

Z5977A

【作者名】

辰巳 結愛

【あらすじ】

私の名前はルフィ。旅の女傭兵である。今日も自慢の銀髪をなびかせつつ自由気ままな旅を続けている。女顔の神官・ダルと出会った事から、私の身の回りにはとんでもない事件が起き始めて…。

第1章・銀と蒼の邂逅（前書き）

「General and Priest」シリーズ第1弾（予定）。

今後の皆様の応援しだいで第2弾、第3弾といふかと思われます。稚拙かつ長い文章ですが、なにとぞよろしくお願ひします。

第1章・銀と蒼の邂逅

「へえ。こんな所を1人で旅かい？」

…私は旅の傭兵である。非常に軽い装備をしているので、あまり

傭兵と言つたか剣士には思われていないらしい。

今回もどうやら、私の姿を見てカモだと思ったのである「盗賊たちが、私の周りをぐるりと囲んで言つてきた。

「……私を襲つつもりなら、やめておいた方が良いと思いますけど。

」
「そう言われて、『はい、そうですか』とでも言つと思つたか？」

「…できれば言つて欲しかつたんですけど…仕方ありませんね。」

ふう、とため息をつき、私は彼らを完膚なきまでに叩きのめした

…。

…あの盗賊たちのせいで余計な時間食つちやつたな…。

今回の目的地…フェイス・シティに着いた時はもう夕暮れ近くになつていた。

フェイス・シティの特徴はなんと言つたも神殿の数。街を囲む正三角形をかたどる様に3大神である「孤高の神」、「灼熱の神」、「華麗の神」を祀る大神殿があるのをはじめ、小さな分院や古書も多く残る図書館が数多く存在する。当然のようすに巫女や神官と言つたいわゆる「神に仕える者」も多い。故にこの街は別名「信仰の街」。

…ここになら、私の探すものがあるかもしれない。

淡い期待を抱きつつ、今日の宿を探す。…この時間では、もう図書館は閉まつているだろう。探しものは明日からでも良い。…時間はたつぱりあるんだし。

街を散策しつつ、宿を探し…気づく。どこからか私を見ている視線に。

… もつときの盗賊が逆恨みか？

思つてその視線の主を探すと… 意外とあつたりと見つかった。

海の色に似た髪はうなじ辺りで切られ、サファイアと見紛うばかりに澄んだ青い瞳、女の私ですら思わず見とれてしまう美貌。年のは頃なら24かそこら。

山賊では、もちろんない。服装は「華麗の神」を祀る者特有の青い色糸の縫い取りのしてある法衣。そう、あの格好はまさに… 巫女… じゃ、なくて…

… し、神官？男！？え、え、ええええええ！？

驚いている私にむかって、その神官（だと思つ）はどんどん近づいて来る。

「君は、『銀髪の悪魔』だな。」

私の目の前でとまるや否や、その神官（確定。声はぱっちり男だった。）がそう言った。

しかも疑問系じゃなくて断定しやがったし、この人。

「… 私は悪魔じやありません。ただの傭兵です。そもそも『銀髪の悪魔』は、伝説上の人物の名では？」

『銀髪の悪魔』とは、2000年前に1晩で当時最大の都市であつたコラプス・シティをたつた1人で壊滅させた伝説上の人物。であると同時におどぎ話に出てくる「第4の魔王」としても登場する。この男がどちらの意味で呼んだのかは知らないけど、とりあえず否定しておこう。

「僕も神官の端くれ。人間とそうでないものの区別はつくつもりだが？」

「それはつまり、私は人間ではないと…？」

「そうだ。」

うわ、はつきり言いやがつたしこの男！まさか完全に人のこと悪魔扱いするつもりじや！？一瞬でも見とれた私が馬鹿だつた！

万が一に備え、相手に気づかれないように逃げの体勢を整える。

… さすがに神官サマ斬つて、お尋ね者にはなりたくないし。

「『銀髪の悪魔』なんて呼ばれているが、本当はそうじやない。本当は不老不死を得た人間……『不死者』だろ?」

「黙つていると言つ」とは、肯定していると受け取つていいのかな、
『銀髪の悪魔』さん。」

「……『銀髪の悪魔』と言つ呼ばれ方は気に入らないんですが。」

「失礼。君の名前を知らないもので。僕はダル。ダル=プリース。君は?」

「……ルフィ。ルフィ=ジエネルです。」

につこり笑つて右手を差し出す神官ダルに、私はむくれたような顔で返した。

私はルフィ=ジエネルは、竜の皮で作つた軽装鎧と、無銘の漆黒の大剣を持つ、22歳くらいの銀髪美人である。瞳は光の加減によつて灰色にも青にも見える。

ただし私は、彼=ダル=プリースが言つた通り、不死者と呼ばれる存在である。実際の年齢は2022歳位だったと思つけど、忘れた。

ちなみに2000年前に1晩でコラバス・シティをたつた1人で壊滅させたとされる『銀髪の悪魔』とは私のことで……その時はまだ不死者ではなかつたんだけどね。それに多少この話誇張されてるし。いくら私でも1晩じや無理よ。……確か丸一日かかつた気が。

……まあそれはさて置き、私は「ある日」を境に不老不死の不死者になつた。どうして「なつた」のかも、いつの間に「なつた」のかもよく覚えていない。

まあ、なつてしまつたものはしようがないので、今の仕事……すなわち旅の傭兵なんてものをしている訳。お金は生活する上で必要不可欠だから。

別に飲まず食わずでも死にはしないけど、不死者だつてお腹はすくし喉だつて渴く。何より食べる楽しみまで捨てたくないし!

そもそも不死者とは、何らかの理由により不老不死を授けられた（あるいは得た）人間の呼称である。ただしそれは伝説上の事とされている。そんな人間がうようよいたら、悪巧みをしよーとする人間も出てくるので、世間一般では不死者の存在は悪魔や魔女同様、ただのおどぎ話の中の存在と認識されている。

こつちとしては悪魔、魔女と同列に扱われるなんて迷惑…と言つより不快な事この上ないんだけど。

それにして…いくら神官とは言え、普通の人間と外見上は大差ない私を見ただけで不死者とわかるなんて…ダル＝プリース…いつたい何者！？

第2章・戦士と神官の契約

「ここではなんだな…。とりあえず『青の神殿』で話をしよう。」「構いませんよ。私も、あなたに聞きたいためありますし。」

『青の神殿』と言えば、この都市の北、「華麗の神」を祀る大神殿の名前。さすがに場所くらいは知っているし、ここからなら歩いて10分とかからない。

そう思い、歩き出そうとして……唐突に、景色が変わった。

今さっきまであった夕日は影も形もなく代わりにあるのはほの明るい人工的な照明。青を基調とした内装に、振り返ればイル力を模した像。それはすなわち、海を統治すると言われる「華麗の神」を祀る神殿の中である事を示している。

…まさか、今…

「空間転移の術…っ！しかも2人同時に！？」

「僕は無駄な時間を費やすのが嫌いでね。」

ようやく私の右手を離し、にこやかな笑顔でいる女顔の神官に視線を向け、思わず1歩後ずさる。

「いや、時間がどうのとかそういう問題じゃなくて…空間転移って、相当高位な神聖魔法じや…」

正直な話、この2000年近くで空間転移を扱えた人間は両手の指で足りる程度しか見た事がない。しかも大抵はかなりの年齢：老人と言つても差し支えないような者達だけだったと言うのに…ほんの24、5歳位のダルに、しかも2人同時の空間転移魔法が扱えるとは…にわかには信じがたい。

「……一応僕は色付き法衣…カラーローブをもらっているんだが?」
やや憮然とした表情で言つダルに対し、私は今度こそ完全に沈黙した。

色付き法衣を持っていると言つ事は、相当高位の神官だつて事よね…？私を一目で不死者と見抜いた事と言い、空間転移魔法を使つ

た事と言ひ……こいつ、教皇クラスの神官なんじゃ！？

私の考えをよそに、ダルはにこやかな笑顔になつて私に向かつて一礼をした。

「改めて自己紹介しよう。僕はダル＝プリース。通称、海神官。ご覧の通り、『華麗の神』に仕えるものの端くれ也。」

「端くれ」つて…思いつきりど真ん中にいるような奴の台詞じやないような…。

「…どうも、ご丁寧に。…………で？その『海神官』様が、私如き『不死者』に何の御用なのでしょうか？」

「ルフイ、君…なんか怒つてる？」

私の言葉に、ダルは心底不思議そうに…と言つよつあからさまにビクつきながら返す。

……別に怒つてる訳じやないんだけど。

「…怒つてません。」

「良かつた。正直な話、僕は君を待つていたんだ。」

「…………はあ？」

…すみません、宗教の勧誘なら即行逃げたいんですけど。私力ミサマに興味ないし。

本日2度目の逃げの体勢を整えつつ、ダルの様子を見る。

「2週間ほど前に御神託が降りてね、それで『

「すみません、私宗教に興味ないです。」

「いや、人の話は最後まで聞こうよ。」

くるりと踵を返した私の肩をがつしりと掴み、ダルは私の逃走を阻止する。

じ…冗談じやない！過去に何度も「御神託」と称した自称神の代理人たちの寝言に付き合わされてきた事か！

「御神託でね、『死なずの者と共に世界を救え』つて…」

「力の限り、目一杯、心をこめてお断りします！」

「ええつ何で！？『世界を救う』なんて、これほど素晴らしい冒険は無いじやないか！」

間髪入れず答えた私に、ダルは捨てられた仔犬の様な目をして訴えかける。が、いかんせんその瞳と言葉の間に多少なりともギャップがあるので、私の心を動かすまでには至らない。

「ルフィは世界が崩壊してもいいのか！？」

「正直な話、世界の危機とか平和とか興味ないんです。ただ私は日々の生活に困らなければ良いので。」

そう、私には目的がある。世界が崩壊する事で目的を…私に、「死」が訪れるのなら、それでもいいと思っている。

「…君がこの街に来た理由は、『不死者を殺す方法』が書かれたと言われる書物だろう？」

……んなつ！

「何で…っ！」

「取引をしよう。僕と共に『世界を救う』手伝いをしてくれるなら、事が終わり次第、君の望む書物を渡す。」

「…断つたら？」

「断らないと思うけどね。」

不敵な笑みを浮かべ、言い放つダル。

…この男…本当に何者なの？って言つたがどこからこんな自信が出るの…？

「…わかりました。ただし、条件付きです。」

「どうぞ。」

「一つはあなたとタメ口をきく事。もう一つは一年間しか付き合わない事。…いいわね？」

それを聞いて…ダルは再び、深々と一礼した。

それはすなわち、契約の成立。

「それじゃあよろしくな、ルフィ。僕もできるだけサポートするよ。」

「…」

そう言えば…「世界を救う」って、主に何をするのかしら？

私が疑問を口にするよりも早く、ダルは私につっこりと笑いかけ…

「じゃあ、張り切つて悪魔退治の旅に出よー。」

…な…

「何ですってえええっ！」

私の悲痛な叫び声とダルの朗らかな笑い声が、神殿内にこだましました。

第3章・悪魔と不死者の戦闘開始

悪魔退治…?

聞き違いでなければ、今ダルはそう言つた…わよね？
「悪魔退治つて…！私そんな事できない…訳じやないけど、難しいわよ！」

「だから、僕も手伝うつて。それに君は死なないんだから大丈夫だ。

「さりと無神経なこと言つなあああつ！いくら私が不死者とは言えど、怪我すりや痛いのよ！」

「そこはまあ…ファイトとガツツと根性で。」

にこやかを通り越して、いつそ爽やかなまでの笑みを浮かべて言うダルを見て、私は思わず頭を抱えてその場にうずくまつた。

…悪魔に物理的な攻撃は通用しない。なぜなら悪魔と称されるものは、大抵の場合世界に溜まった「邪氣」とか「悪い心」とか「負の感情」…世間的にはひつくるめて「邪悪なココロ」なんて呼んでるけど、そういう物が、何らかの形で具現化したものに他ならないからだ。だつて「心」は物理的に壊せないでしょ？

通常、悪魔を倒すにはそれ専用の武器を使つが、神聖魔法を使って浄化するかの2通り。

…その神聖魔法だつて、神に仕える神官や巫女、神聖魔法を研究した魔道士くらいにしか扱えない。

私の持つている剣は、一応悪魔も退治できる剣だけ…やはり、剣である以上は当てないといけない。

…悪魔つてすばしっこいんだもん。時々火とか吹くし。それに、人間に比べてかなり体力があるしね。だから、いくら歴戦の勇者たる私でも悪魔と戦つて無傷でいられる保障はどこにもないって訳で…まして、「ファイトとガツツと根性」でどうにかなる相手でもない事は嫌と言つほど知つていい。

「引き受けてしまった以上はやりますけど…何か当てはあるのよね？」

「とりあえず、今現在…かな。どうやら、悪魔はあらかじめ僕たちに目を付けていたらしい。」

…は？

言つている意味が分からず、一瞬私は呆けるが…次の瞬間、無意識のうちに剣を抜き払い、唐突に来た背後からの一撃を止めていた。

今…何！？

ぐるりと振り返つて攻撃の主を確認し、私はそいつを睨みつける。人間に見える外見を持つてはいるが、口からは牙のような物がのぞいており、白目の部分が血のように赤く、金色の瞳には爬虫類のような縦に長い瞳孔が見て取れる。武器を持っている様子は無いが、まさに「鉤爪」と呼ぶにふさわしい爪がその指から生えている。「ほう…人間にしては敏い反応するじゃねえか。」「まさか…悪魔！？」

「その通り。以前から蒼神官が俺たち『魔族』に対して何かしようとしていると聞いていたのでね。」

クックと笑いながら言つ相手。

「蒼神官じゃなくて海神官だつ！」

「いや、突っ込むことはそこじやないでしょ…」

本氣で怒つたように返すダルに対し、思わずこいつが突っ込む。目をつけられてた事に突っ込みなさいよ。

いきなり悪魔と戦う羽目に陥るとは思わなかつた！もう少し心の準備が整つてから来て欲しかつたけど、来ちゃつた以上はどうしようもない、こつちもやるしかない、か。

「雇われただけなんだろうが、そいつと関わったのが運のつき。可哀想だが蒼神官もろとも死んでもらつぜ、人間の小娘！」

「楽に殺せると思わない事ね！」

幸い、相手は私を不死者と認識していないらしい。まあ、認識していたら「死ね」なんて言わないだろうけど。

鉤爪を構え、相手は一息に私との間合を詰めた。が、そう来る事はこちらも予想済み。剣を構えたまま軽く右へと飛ぶ事で、相手の一撃をかわす。

一撃で倒せると思っていたのだろう。予想が外れたためか、相手の動きが一瞬止まった。悪魔はその身体能力ゆえ、一撃必殺の攻撃を仕掛けてくることが多い。つまり、かわされてしまう事など頭の中に無い上に、攻撃の後は大きな隙ができるやすい。

その隙を逃す私ではない！

「己の過信と、人間を侮った事を後悔なさい！」

ぞくり、という感覚と共に、悪魔の体は横2つに分かれた。

さつきも言った通り、私の剣は少々特殊である。悪魔を斬る事ができるのも特徴の一つだけ、何よりこの剣、何から何まで黒曜石でできているかのごとく黒い。これはもう漆黒と呼ぶべき色をしているのである。

「馬鹿な…この、俺が…人間の剣」ときに…！人間」ときにいいいいっ！」

「…残念ながら、あなた程度の悪魔とは何度も戦つてきていますから。」

断末魔の悲鳴を上げる相手に言い放ち…もつ一度、今度は首を搔き切る。

そして、黒い靄のような物だけが、そこに残つた…。

「いや、流石だな。こんな短時間で悪魔を倒すとは。今まで僕が見てきた中では最短記録だ。」

「伊達に長生きしてる訳じゃないの。」

拍手をせんばかりに浮かれているダルに対し、私は冷静に返す。

「そう言えば、その剣。刀身に古代呪文がびっしりと書き込まれてるな。」

「…は？」

「その剣が黒いのは、魔剣として作られたからだろうな。よくそん

な強力な魔剣を使いこなせるもんだ。」

興味深そうに私の剣を指差しつつ、ダルはとんでもない事をさりと言った。

「魔剣、て…これが?」

恐る恐る剣から手を離し、思わずダルに聞き返す。

「ああ。悪魔が斬れるのも、たぶん魔剣だからだろうな。さらに呪文で切れ味をあげて…。どれくらい使っている?」

「そんなに長くないわよ。… 700年位?」

「気づけ、普通はさびる。」

… そう言われば。しかし… 知らなかつたとは言え、そんな恐ろしいもの使つていたなんて。

一般的な魔剣と言えば、持ち主の精神を崩壊させてただの辻斬りにさせたり、持ち主そのものを悪魔に変えたりと、色々日々のついている物が多いんだけど…

「ああ、安心しろ。その剣は君以外になら魔剣としての力を遺憾なく発揮するだろ? が、君にだけは絶対服従… ある意味、聖剣以上の存在だからな。」

「それつてつまり?」

「君が持つてている分には、心配ない。」

ああ良かつた。… って良くないわよーつまり、私がこの剣手放したら、ほかの人がこの剣の犠牲になるつてことじょ!?

… うあ、もう剣買い換えられない…。使いやすいからいいんだけど…。

「でも、なんであなたはそんな事わかるわけ? 見ただけなのに。」

私の問いかけに、ダルは少しの間考えて…

「高位神官として身に付けた力… かな。」

と、どこか寂しそうな笑みを浮かべて言った。

「そんな事より、問題は『誰が僕たちの動きを悪魔に知らせたか』だ。」

「『僕たち』じゃ無くて『僕』にしておいてくれる? 一応相手は私

が不死者だつて知らなかつたみたいだし。」

「その大元を叩かないと、ご神託を遂行した事にはならないな。」

「聞けよ、人の話。」

「と、言う訳で。やっぱり君と僕は旅に出なければならぬいりしい！」

「何がどう、『と、言う訳』なのよおおおつー！」

私の絶叫も無視して、ダルと私は悪魔退治の旅とやりて出る事となつた。

…この時はまだ、私もダルも、事の大きさがわかつていなかつたのである…。

第4章・見た目と中身の落差

「ところでルフィ、今回の黒幕は何者なんだと思う？僕は意外と魔王の内の1人じゃないかと思うんだけど。」

街を出る前の腹ごなしに入った街の食堂で、野菜サラダを口いっぱいに頬張りながら、ダルは言った。

「…あなたがそこまで注目される存在とは思えないんだけど。ついでにナイフをこっちに向けないで。」

野菜サラダの何にナイフを使うのよ、こいつは。

「あ、悪い。普段あまり神殿の外には出ないものだから、つい嬉しくて。」

「そりや、その若さでカラーロープ持ちの高位神官じゃね。かなり小さい頃から神殿にこもってないとそこまでいかないでしょ？」

「いや、僕は見た目より案外年を取ってるんだよ。」

「2000年以上生きている私から見れば若者よ。」

にこやかなダルにつられたのか、私もつい笑顔で返してしまつ。

…何が嬉しいのか、彼は私と会つてから終始笑顔でいる。…まあ、

さすがに悪魔が出てきた時は笑つてなかつた気がするけど。

「でも、カラーロープ保持者って、案外魔王たちから目の敵にされているって聞いた事あるけどな。」

「…魔王は神とのにらみ合いで忙しいはずでしょ。人間まで相手にしてたら、神に付け入る隙を与えるようなものじゃない？」

「それもそうか…。」

うーんと唸り、ダルは何事か呟きだした。…ただ、その声は小さすぎて聞き取れなかつたが。

「…ところでルフィ、君はどれくらい悪魔の事を知っている？」

「何よ唐突に。そうねえ…悪魔と呼ばれるほとんどが『邪悪な口口』が具現化したもの。人間に近い姿をしている者ほどその力は強い。でもって、その悪魔の頂点に立つてるのが3大魔王と呼ばれる

存在だつて事くらいかしら。」

3大神と対を成すように、魔王も3人いる。「紅玉の魔王」、「黄玉の魔王」、「蒼玉の魔王」である。地上を支配するとされる「黄玉の魔王」が一般的に有名だけじ、ほかの魔王も、知らない者はいない程度には有名である。ただ、どのような能力を持つているのかが明らかなのは、「黄玉の魔王」だけという話。

「ルフィイ、君の知識は一部間違つてゐる。魔王たちは悪魔とは違う。」サラダの中のセロリだけを器用によけつつ、达尔はフォークをきゅうりに突き立てながら言葉を続ける。

「悪魔は、魔王たちにとつてはただの食料に過ぎない。魔王たちの食料は主に生きとし生ける物すべての『邪氣』。邪氣の塊である悪魔は、魔王たちにとつてはうつてつけの食料なんだ。」

うあ、今とんでもなくグロい光景想像しちゃつた。

「…ルフィイ、君、今悪魔を頭からバリバリ食べてゐる魔王の図を想像しただろ?」

「う、ばれた?」

「この話をすると、大抵の人間はそう思つらしいからね。」

皿の上には綺麗にセロリだけ残つたサラダが存在している。

…案外器用な男ね、こいつも…

「魔王たちの『食べる』は僕たちの食べる事とは少し違う。そんな…吸収する、と言つた方が良いか。」

「食べると言つよりも飲む感覺?」

「まあ、概念的には近い。要は悪魔が魔王を恐れてゐる本当の理由を知つておけばいいって事さ、ルフィイ。」

につこり笑つて、まるで孫に物語を語るおじいさんのように、ダルは穏やかに言つた。

…そう言えば…私、こいつに聞いつつと思つてたことがあつたのよね。

「じゃあダル、今度は私から質問をせてもううわ。」

「年齢とスリーサイズ以外ならなんでもいいわ。」

「誰が聞くか！」

「この期に及んでこんなボケをかます神官なんて見たことはおろか聞いたことすらないわよ…って言つた男のスリーサイズなんて聞いて役に立つのは服屋と医者くらいのもんでしょうが…しかも私のツツコミになんかしじょうげてるし。

「とにかく…さつきの悪魔、あなたの事を『蒼神官』って呼んでたけど…どういう事？」

「……まあ、悪魔連中が僕につけたあだ名じゃないか？ほら、僕の本当の法衣の色って青だし。」

「いや、ほらとか言われても私それ見てないし。」

現時点でのダルの格好は普通の神官同様、白い地に「華麗の神」に仕える者特有の青い刺繡が施されているもの。私にはその「蒼」がピンとこないのである。…まあ、確かに髪の色は青だけど、「蒼」と呼ぶにはちよつと無理あるし…

「そもそも僕、『蒼神官』って呼ばれるのは好きじゃないんだ。」

応『海神官』って言つたりつねがあるわけだし。

「ふうん…」

心底嫌そうに言つたダルの言葉に、私はほんの少しだけ違和感を覚えた。

何が不自然という訳ではないのだけど…何かを『こまか』している様な感じがする。それはこの2000年間で培われてきた勘がそう言つてているのだが…何が妙なのかがわからない。

「とにかく、今回の『神託』にはさ、『邪を統べる者』って言つ单語が出てきているんだ。魔王絡みだと見て間違いないと思つんだけど。

「話題を変えたいらしく、やや強引なまでにダルは話の方向を今回

の黒幕…しかも魔王の方向に持つていきたらしい。

…まあ、嫌がることをとやかく言つるのは私の趣味じゃないから、別にこれ以上突つ込む気はないけど…

「……つて言つたが、私、今回の神の寝言…もとい、『神託の全内容をまだ聞いてないんだけど。』

「神の寝言つて…また失礼な発言だな。」

「知つてるもの。神がいかに無力な…いえ、力があつても何もしてくれない存在だつて事を。」

苦笑を浮かべて言うダルに、私はあつさりとした表情で言い放つ。いくら私が神に祈つても、この体は元には戻らなかつた。だから神は、何もしてくれない存在だと、私は思つてゐる。

「それでも、すがつて生きてみようとは思わないのか?」

「思わないわね。大体、自分以外の存在にすがつて何とかなつたつて、それは実力じやないし。すがられる方も迷惑よ。」

「そう…か。強いんだな、ルフィは。自分の力を信じている。だからきつとそんな言葉が出てくるんだろうな。」

そういうたダルの顔は、どこか寂しそうで…そして、どこか眩しそうに私を見ていた。

「…で、ルフィ曰く、『神の寝言』の全容だけ?」

「うあ、神官が神託の事を寝言て言つた。」

「いや、その表現、実は結構気に入ってるんだよ、僕。」

はははと笑いながら、自分の存在をさらりと否定するよつなことをのたまつ。

こんなに神に反逆的な高位神官つて、どうなんだろ?…

「こんな内容なんだ。『邪を統べる者、この世を闇に満たさんとす。海に仕えし神官、死なずの者と共に世界を救つ。邪の複製、死なずの者達の前に立つ。死なずの者、邪の一欠を用いて邪の複製を破壊せり。』。」

……冗談。まさか本当に魔王絡みの話じやないでしょ?うね?

そりや、私だつて「銀髪の悪魔」なんて呼ばれて恐れられてるし、場合によつては第4の魔王扱いまでされている存在だけ?…本物の魔王に、不死者とは言え人間の私が戦つて勝てる訳無いじやない!…と、待てよ…?

「ダル、今のを聞いていると…別に魔王がラスボスってわけじゃないくて、『邪の複製』とやらがラスボスなんじゃない？」

「ん…？確かに、言われてみればそうかも。でも、『邪の複製』って一体…？」

うーむと考へ込むダルの顔をのぞきつつ、私はつい声に出して聞いてみた。

「わかりそう？」

「無理。」

……即答！？

「あなた神官でしょ！？それ位は理解できないでどうするのよ！」

「はじめて聞く表現を理解しようとが無理だ。僕だつて万能じゃないんだよ、ルフイ。」

うわ、開き直りやがったし、こいつ。しかも何か爽やかな笑みを浮かべてるし！

「とにかく、何とかなるさ。…僕つて生まれついてのトラブルメーカーだから、一緒にいれぱきっと向こうから色々問題が出てきてくれるつて。」

爽やかフェイスのまま、とんでもない事をさらりとぬかし…ダルはそそくさと店を出る。

……野郎…勘定私に払わせたわね……

セロリの山と伝票が、私の目の前に置かれていた。

第5章：傭兵と戦士の価値観

「…ダルは、自分がトラブルメーカーだといった。それにしたって…
「いきなりこれは無いんじゃないの！？」

店を出た瞬間から、複数の悪魔が私たち2人を襲つた。

「…言つただろう？僕はトラブルメーカーだつて。」

「だからって、何でこんなにすぐに襲われなきやならない訳！？」

「…神の思し召し？」

にこやかな笑顔で答えるながらも悪魔の攻撃を軽やかによけるダルに、思わず一撃をぶちかましたくなるがそこはぐつと堪えて。私は襲いくる悪魔たちを情け容赦なく切り捨てる。

「…が。いかんせん数が多くすぎる。斬つても斬つてもきりがない。

拳銃、こんな街中で暴れられたら…当然、街の人たちにも被害が及ぶ。

「…せめて出てくる場所を選んで欲しかったわね！」

「意外と悪魔は市街地に出ることが多いんだよ。知らなかつたのか、ルフィイ？」

「うだうだ言つてないで手伝いなさいよ！神官なんだから、悪魔退治用の魔法の1つや2つ使えるんでしょう！？」

私の苦情に、ダルはぽん、と手を叩き…錫杖を構えた。

「言われてみれば、僕だけ楽してるのも変だよな。」

ひょいひょいと悪魔達の攻撃をかわしつつ、ダルは口の中で何かを呑みはじめる。かつん、と錫杖で大地を叩いた。その瞬間…

悪魔たちに、大地から上へとあがつた雷が突き抜ける！それだけに止まらず、悪魔の体を突き抜けた雷は再び悪魔の体を通り、大地へと舞い戻つた。

「…これは…

「邪滅迅雷…治癒を中心とする神聖魔法の中でも、邪を攻撃する部類に入る高位魔法…っ！」

「その通り。さすがルフィ、伊達に長年生きてる訳じゃないな。」

「ふふん、と自慢げに鼻を鳴らしながら、达尔はもう一度錫杖で大地を叩く。すると今まで悪魔たちを貫いていた雷は消え失せた。

今まで悪魔たちのいた場所には、微かに何かが焦げたような臭いと黒い靄があるだけ。

……

「……こんな事できるなんなら、私いらないんじゃ……？」

「何を言う！ ルフィがいてくれるからこそ、僕が呪文詠唱に専念できるんじゃないか！ 僕一人だつたら、確実に負けてるよ。」

私の眩きを思いつきり否定する。

：つまり何か、私は時間稼ぎ要員か。

「それに、ルフィが連中をあらかた片づけてくれるからこそ、邪滅迅雷程度の範囲で何とかなる訳だし。」

私の冷ややかな視線の意味を感じ取ったのか、慌てたように达尔は言葉を付け足す。

本心から言つてくれているのだろうけど… 「邪滅迅雷『程度』」つて辺りがムツとするわね。あの呪文だって、最初に达尔が見せた瞬間移動に次ぐ位の高位呪文なのに。

「つまり、その…僕と君は、さ…」

「最高の相棒だ、と言いたい訳か？」

「そう、その通り！」

うまく言葉の出でこなかつた达尔に助け舟が出され、実に嬉しそうに达尔が手を叩く。

が。今助け舟を出したのは私じゃない。どう聞いても男の声だ。达尔もそれに気づいたのか、はつとした様子で声の主を見る。

私の方はと言うと、すでに戦闘体勢を整えてある。後は相手の出方しだい…

「いやあ、いいもの見せてもらつたわあ。大量の悪魔と、それに立ち向かう神官と女剣士。しかも2人ともなかなかの美人ときてる。」

「あなた、何者！？」

拍手をしながら近づいてくる男に、牽制の意味を込めて問いかけ
る。

見た目は17、8と言ったところか。真っ赤な髪に同じく真っ赤
な瞳。革鎧を纏い、腰に短剣をぶら下げていることからすると、ど
うやらこの男…旅の「戦士」か。

「俺はディール。職業は見ての通り戦士さ。最近悪魔が大量発生し
てるって言つんで、悪魔退治人みたいなこともやつてるかな。」「

…あなたが、悪魔ではないと言う保証がないわ。」

「おいおい。その神官さんならわかるんじやないのか？何せ、邪
滅迅雷…だけ？あれ使えるんだから、悪魔か人か位は簡単にわか
るんだろう？」

「…彼が悪魔じやない事は、僕が保証する。」

今までずつと男…ディールだけ…？を睨むよつと見ていたダル
が、ここに来てようやく口を開いた。

それを聞いて安心したのか、ディールとやらはやたら親しげに私
たちに近寄つてくる。

「单刀直入に言つちやうと、あんたら、俺と一緒に悪魔退治しない
か？俺、なかなかの戦力になること請け合いだぜえ？」

「きつぱりとお断りします。」

「うわ。つれねえよお姉さん。」

「そうだよルフィ、戦力は多いに越したことは無い！」

…ディールの言葉に同意するよつと、ダルまでもが私の肩をつか
んで説得にかかる。

…だが…わかつてない。戦士という連中は、自分が楽しむため
に旅をし、様々なモノと…それこそ悪魔たちとだつて戦う。彼らに
とつて、戦いとは娯楽なのだ。

だが、私たち傭兵からすればそれはなんとも迷惑な話なのである。
だつて、傭兵つてお金もらつて戦つている訳で、それを戦士とい
う上がり…どころかただ働きしてくれる連中がいるなら、雇い主と
してはお金のかからない方を選ぶのは当然である。

……傭兵からすれば、「こっちは生活かかってるんだよ」と言ったくなる相手なのである。

「お姉さん、頼むよ。俺、ここんとこ最近1人で戦うこと」に限界感じてんだ。俺のこと下僕扱いでいいからさ、頼むよー。」「

「ルフィイ、ここで彼を見捨てたら、絶対後悔するつて！好き嫌いはよくないぞ！」

「ふち。

「セロリ嫌いのあんたが言うなあ！」

「セロリは嫌いなんじやない！……食べられないだけだ！」

「同じことでしょがっ！それが威張って言えることかっ！」

「待てルフィイ、論点がずれてる！今は『ディール君を仲間にするかどうかであつて、僕のセロリ嫌いはこの際関係ない。』

……やっぱり嫌いなんじやない。

心の中で突つ込みを入れつつ、もう一度、じいっとディールの方を見る。

捨てられた仔犬のような目で、ディールはこっちを見ていた。

……なんで人間って、見捨てられそうになると皆同じような目になるんだろう？……？確かにダルもこんな目をして私を引き止めようとしていたような。

「……正直、私は戦士を仲間に加えるのは反対です。……が。私の雇い主が仲間にすると言つてている以上、傭兵である私はそれに従うしかありません。」

渋々といった風に言つ私の言葉を聞き、ダルとディールの2人の顔が輝いた。

……決して、仔犬の目のWパンチにやられた訳じゃないわよ……うん。

「ところでティール、あなた……自分が『強い』って言つてますけど、どの程度強いんです？」

「……ルフィ姉さん、俺にもため口きいてくれよー。俺の方が年下な

んだからさあ。」

街を出てすぐの森の中で、私はティールに問いかけた。

「…つて言つたか「姐さん」つて…。」

「俺の強さはハンパじや無いぜー今までの最高記録は4匹の悪魔を同時に相手して勝利。あ、これ素手オンリーの場合ね。」

「素手オンリー…? といふことはティール、君は魔法が使えるのか?」

「そう! ダル兄さんみたいな神聖魔法は使えねえけど、それとは逆の暗黒魔法ならバリバリ使えるぜ!」

「一瞬、达尔も私も硬直した。

神聖魔法は「善」とか「正」とか呼ばれているものの力を借りて、「邪」を滅する魔法。

それに対しても暗黒魔法は強大な「邪」の力を借りて「邪」を滅する…いわば「毒をもつて毒を制す」魔法である。

神聖魔法にしろ暗黒魔法にしろ、使いこなすには相当量の知識と経験、そして魔力と呼ばれる個人の許容量が必要となるはずなのにダルもティールも、この若さで魔法を使いこなすというのは、魔法に関してかなりのセンスがあることになる。

「なんか、めげそう…。」

「何でそこで固まるのさ。」

「驚いただけだ。…まさか暗黒魔法の使い手とは思わなかつたなあ…」

「つて言うかその若さで魔法が使えることの方にびっくりよ。」

「若さつて…おれ、ルフィ姉さんよりちょっとばかし年下なだけじゃん。」

きょとん、とした顔でのたまつティールに、一瞬殺意沸きつつも私は周囲を見回す。

「どうやらまた、悪魔のお出ましらし…。」

いつたいどれだけの悪魔が、私たちを狙つてゐるつて言つてよー。」

第6章・戦いと任務の目的地

「おっしゃあっーーきなり登場ーーうつ燃えるぜええっーー
本日3度目の悪魔の襲撃にうんざりしている私を尻目に、悪魔との戦闘初参加のディールは、その数に怯えるどころか嬉しそうに吼えた。

「元気だなあ、ディール。」

「私としてはもうこれ以上の襲撃は勘弁して欲しいわね。」

すっと剣を鞘から引き抜きつつ、襲いくる悪魔を切り捨てる。

…何と言つか…

「低級悪魔じや私たちには勝てないってこと、そろそろ思い知つて欲しいんだけど。」

「いや、それで高位悪魔に出でこいられても困るんじゃないかな?」「まあね。」

ビシバシ悪魔を倒しつつ、私はディールの方を見る。

…おそらくは何らかの魔法のかかつたグローブなのだろう。淡い赤の光を放つそのグローブで、ディールは次々と悪魔たちを殴り、吹き飛ばす。

「いやあ、自分で言うだけあって、なかなかやるじゃないか、彼。「のほほんとしてない」でさつさと片付けてくれる?無駄な体力を使いたくないの。」

全く動く気配のないダルに、冷ややかな視線を送りつつ苦情を申し立てる。

「ディールに任せてみるつていつのは?」

「大・却・下。」

自分で倒そうという考えは無いらしく、ダルは自分の意見の不採用に不満そうな声を上げた。

…高位神官つてこんなものぐせな奴でいいの!?

「ルフィイ姐さん、後ろだ!」

え…？

ディールの声を疑問に思つ暇もなく、戦士としての勘が私の体を突き動かした。右足を軸にくるりと半回転しつつ敵の攻撃を受け止め、回転の勢いを利用して相手を吹き飛ばす。

ちいいつ！ダルに苦情を申し立ててる場合じゃなかつたか！

「ルフィ姉さん、こつちの援護も頼みたいんだけど。」

「何する気！？」

「魔法使つて、一気に一掃。」

ぱしつと拳を手のひらに打ち付けつつ、ディールは宣言して…襲い来る敵を殴り倒しながらも、口の中で呪文を唱え始めた。

…呪文は、いわば「力」を借りる際の手続きのようなもの。これが無ければ、魔法はその力を発動してくれない。だから唱えなきやいけないつていうのはわかつてんんだけど…面倒くさいものよねえ、魔法つて。唱える間は隙ができやすいし。

…なんて考へてる場合じやない！ディールが使う魔法は暗黒魔法。ダルの使つている神聖魔法と違つて、「邪」だけを限定して攻撃するものじやないから…

「ダル、ディールから離れるか、めちゃめちゃ近くに行くかして！」

「ええっ！？何で？」

「ディールの魔法を食らいたいの！？」

「いや、それは勘弁…」

してください、とでも言おうとしていたのか。だがそれはディールの声にかき消された。

「イビル・ブレイズ！」

本来なら存在しないはずの漆黒の炎が、術者の呼びかけに応じるように出現した。

…イビル・ブレイズ…術者の視界に入る範囲内なら、術者以外の存在を焼き尽くす魔界の炎…

そんなものぶつ放されたら…

「ディール！あんた私たちを殺す気！？」

「…ああっダル兄さん、ルフィ姉さん！？何でそんなとこに！？」
気づいてなかつたんかい！思わず突つ込みそうになるが、それは
襲つてくる炎によつて阻止された。

すでに悪魔たちはこの炎に巻かれ消し炭と化してしまつたようで、
残つているのは私とダルだけのようである。

…この呪文で死ねないことは、経験上知つてゐる。しかし、不死
者の持つ驚異的な回復力をもつてしても、この呪文によつてできた
火傷は完治するまでに2、3日的时间が必要となる。

…つまりは…食らうだけ損つて事！2、3日も火傷の痛みを引き
ずりたくはない！

「…しゃーないなあ…」

「え…？」

ポツン、ヒタルが何事か呟いた。かと思いきや、彼は錫杖で大地
を鳴らし…

「天界烈火」

…言うと同時に、ディールが呼んだ魔界の炎が消え、周囲は何事
もなかつたかのような静けさを取り戻した。

今…一体何をしたの…？

「うつわ。ダル兄さんつてやつぱ凄え。」

目を輝かせながら、ディールはなおも言葉を続けた。

「今のつて、俺の暗黒魔法をダル兄さんの神聖魔法で中和したつて
事だよなあ！？しかも全く同じ力で！」

「目には目、炎には炎で…。本来の天界烈火はイビル・ブレイズ同
様、自分の視界に入つた『邪』を限定で焼き尽くす『炎』。マイナ
スにはプラスをつてどこかな。」

さらりと言つてのけたけど…それって、ディールが使つた魔力と
全く同じ魔力を使ってぶつけないと完全には中和できないってこと
じゃない？それってつまり…ダルは魔法を使つてるところを見ただ
けで、どの程度の魔力を使つてるのかがわかるつてこと…？

「て言うかディール。君、魔法を使うときはもう少し周囲を気にし

たほつがいいと思つよ。今回は僕がいたから良かつたようなものの、下手をすると味方を巻き込みかねない。」

「…以後、気をつけろよ。」

忠告され、しょげるよつて『ディールは言った。

「…そう言えばさつき、悪魔の奴が変なこと言つてたぜ?」

あてもなく歩き出した私たちに、ディールが思い出したよつて声を上げた。

…どうやら、ダルに叱られた事から立ち直つたらしいわね。

「なんて言つてたんだい?」

「『お前たちを魔王の神殿へ行かせる訳にはいかない』とか何とか。

』

…?

「ディール。そういうことは早く言つてくれーこれで今回の目的地がはつきりした。」

「ダ、ダル兄さん?」

がつしとディールの肩を掴み、瞳をキラキラさせて宣言するダル。

…うわあ、なんかすつじいやな予感…

「目的地は『魔王の神殿』!そこに今回の元凶がいるとみた!」

…ああ、やつぱり……。

まあ、行き当たりばつたりの旅じゃなくなつただけ、マシつてことかしらね。

「魔王の神殿つてことは…相手つて、『紅玉の魔王』!/?面白モーになつてきたぜ!」

「では改めて、魔王の神殿に向かって、出発だ!」

嬉しそうに声を上げる2人をジト田で見つつ、私は深いため息をついた。

…つて言つたか…

「目的地が魔王の神殿って言つのはわかつたけど、何で元凶が『紅玉の魔王』な訳?」

私の問いかけに、2人共ギョッとしたような顔をした。

…何? 私何かまずいこと聞いた?

「まさか『孤紅戦争』の話を知らない人間がいたなんて…」「ルフィイ姐さんって、意外と世間知らずなんだな…。」

すみません、昔から神話の類は聞いてもすぐに忘れるもので。呆れたように言う2人に、思わず心の中で謝罪。

「『孤紅戦争』… 文字通り、孤高の神と紅玉の魔王… 天空を司る者同士の戦いのことだ。」

「確かに、両者相打ち… 孤高の神は紅玉の魔王を『魔王の神殿』に封印したもの、自分も力尽きたって話のはずだぜ?」

「ふうん…。」

興味無さそうに呟く私に、2人はちょっとばかし落ち込みつつも話を続ける。

「3000年くらい昔の話だから、どこまでが本当の事なのかは定かじやないけど、結構有名な話だよな。」

「神話の時代から神と魔王は戦つてきている訳だけど、『孤紅戦争』は特に有名で、この世界に存在する全ての生命がその戦いに参戦したんだ。」

私が生まれる1000年も前の話に、正直興味ないんですけど。
まあ、そういう考え方してるから、端から忘れてくつて話もあるんだろうけど。

「鷹と鳥じゃ、あんまり絵にならないわよねえ…。」

…そういう物の捕らえ方か、君は。」

私のイメージをまんま言葉にしたのを、呆れたようにダルが返し

た。

一般的に、孤高の神は真紅の鷹、紅玉の魔王は深紅の鳥の姿をしていると伝えられている。…まあ、神や魔王なんだから、姿なんていくらでも変えられるんだろうけど。

……ん?

「こことは今、孤高の神は不在：つまり、天空を司る者は今はもういないってこと?」

「いや、そうじゃないらしいぜ。」

不敵な笑みを浮かべ、ディールは言葉を続ける。

「孤高の神は力尽きる直前、自分の分身を作つて天空を守らせてるつて話だぜ。」

「え？僕の知ってる話では力尽きたのは分身の方。実は孤高の神の本体は孤紅戦争の時、全く動かなかつたって聞いてるけど。」

…どうにしても、神のやることなのにスケールが小さいし、それ。

「とにかく…一応まだ存在はしてるわけね。」

「まあ、ね。」

相変わらず不敵な笑みを浮かべたまま、ディールは私の言葉を肯定する。

…それにしても…魔王相手、か。なんか大変なことになりそう…。

「ルフィイ、君に聞きたいことがあるんだけど。」

夜も更けて火の番をしていた私に、眠っていたと思つていたダルが声をかけた。

ディールはと言つと、すびすびと嚙りしきくなるへりい心地よさをうな寝息をたてている。

「…寝てると思つてたけど。…何、聞きたいことつて。」

さも当然の」とく私の横に座り、ダルはこっちを見ながら問いかけてきた。

「君は、その…どうして不死者になつたのかな、と思つて。」

「…覚えてないわ。前に言わなかつた？」

「聞いてはいない。でも…そうか、覚えてないのか…。」

…なんでこいつはこんなことを聞くんだろう。興味本位で聞かれ
てるなら腹立つんだけど。

「原因を、一緒に探つてみる気はないか？」

「…は？」

素つ頓狂な声を上げ、思わずダルの顔を見る。

…ああ、やつぱり美人だな…これで男つて言うのがもつたいい
い…

「僕はね、ルフィ。君に会えて本当に嬉しいんだ。今までずっと独
りきりだつたから。」

独りきり…私もそうだ。2000年間、ずっと独りだつた。

不死者であるが故に、誰もが私より先に死ぬ。どれほど仲の良い
人でも、いつかは私を置いて逝く。

私の心が、孤独に耐え切れなくなつてゐるのを、私は知つてゐる。
だから…私は、死にたいと思つてゐる。これ以上、独りでいるの
は辛すぎる。

「僕は今の状況を楽しみたい。だけど、独りでは楽しめない。…だ
から、君と一緒にいたい。」

…は？

「その論理展開の理由が分からんただけど。」

眉をしかめて言う私に、ダルは一瞬困ったような顔をして…

「だあああつ！鈍い！鈍いゼルフィ姉さん！ダル兄さんの…男の決
死の覚悟の告白が分からんなんて！」

告白つて…

…つて言うかディール！？

思わず声のした方に向き直ると、そこには呆れ果てたような顔を
した、ディールが仁王立ちで立つていた。

「寝てたんじやなかつたの！？」

「寝てたさーそりやもうぐつすりと！でもなんかルフィ姉さんが変

な声を上げてるからなんかあったのかなと思えば、ダル兄さんが告白してるしー。」

「いや、僕は別に告白してたつもんじや…」

「ふんすかと怒るティールに、なにせりもじりと書いてこるダル。でもって、何がなにやら今一つ理解に苦しんでいる私。

「とにかく、考えておいてくれるか?この旅が終わったら、返事が聞きたい。」

じゃあもう僕は寝るから、と言ひて、ダルはそそくさと寝袋に入つていく。

後に残るは、未だ興奮気味のティールと、いまいち現状を把握しきれていない私だけ。

……わけ、わかんない…。

「やつと着いたな。」

「ああ。結構長い道程だつたぜ。」

魔王の神殿…紅玉の魔王が封印されていると言つ場所にして、今回私の旅の最終目的地。

ここに来るまでにダルの依頼を受けてから4日かかった。
日数はそれ程ではないにしろ、悪魔の襲撃回数が半端じやなかつた。

…100歩進む毎に襲つてくるつて言ひのせビリコツア見よーつて言つかそんなに悪魔つて多いわけ！？

…まあ、何はともあれ、最終目的地にしてラスボスの元まで来れただから、今のところは良しとしましょ。うん。

「さて…魔王本体が出てくるか、それとももつと別の何かが出てくるか…それは見てのお楽しみつて事で。」

一步前に足を踏み出し、神殿の中に入る。

同時に感知するのは、魔王が封印されているとは思えないほど清淨な空氣。

…ここが元凶だつて言つなら、もつともおどりおどりしげ感じかと思つたけど…

「孤高の神の封印は、3000年経つた今でも健在つてことだな。ディールモーの空氣を感じとつているのか、心底感心したよつて呟いた。

…本当にここが今回の件の元凶なの？神の寝言、見事に外れたみたいだけど。」

「だから、『神託』どうなんだろ？まだ『神託』の文章の意味が完全には理解できないから…」

そう言えば。

確かに、「邪を統べる者、この世を闇に満たさんとす。海に仕えし

神官、死なずの者と共に世界を救う。邪の複製、死なずの者達の前に立つ。死なずの者、邪の一欠を用いて邪の複製を破壊せり。」つて言う全文だっけ。

「邪の複製」って言うのが何なのか、今一つ分からぬのよね。
……そう言えば…

「ダル、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。」

「ん? 何だ?」

「ディールの存在は、この神の寝言…もとい神託のどれにあたるわけ?」

この神託の中身には、ディールの存在が示されていないような…

「ダル兄さん! ルフィ姐さん! こっち!」

ディールの声のする方に向かうと、そこには…

「魔剣…?」

ダルが咳く。

そこにあつたのは、台座の上に深々と突き立てられた一本の赤い剣。離れていても分かる程の禍々しい氣を放つてゐる。

「あれが、封印された魔王…?」

「いや、あれは…魔剣、ロート。紅玉の魔王の剣だ。」

私の言葉を否定したのは、意外にもディールの方だつた。薄笑いを浮かべ、ゆっくりと彼はその剣に近づく。

「ディール! ? よすんだ! それは人間に扱いきれる魔剣じゃない!」

ダルが止めるべく手を伸ばす。が、まるで何かに弾かれたように大きく後ろへ吹き飛ばされた。

今のつて、魔法障壁! ? でもディールは何事も無かつたかのようにこの部屋に入つて…

「確かに、人間じゃあ扱いきれないよな。」

にやりと笑い、ディールはこちらを向き…躊躇つことなく魔剣に手を伸ばし一気に引き抜く!

神の封印が施されているはずのその剣は、随分あつさりと台座から引き抜かれ、ディールの手の中に収まつた。

そう、私が認識した瞬間！私の視界いっぱいにディールの姿が映つた。

……速い！

思つと同時に、左胸に鋭い痛みを感じ。続いて後ろの壁に串刺しにされたことを認識する。

「ディール…あんた、何、を…！」

「うーん、さすが不死者。心臓を刺し貫かれても、生きているとは。

」
な

「ルフィイが不死者だと、どうして知つているんだ、ディール！」

「ん？そりや知つてるさ。だって…俺が今回の『元凶』なんだから。

」
な
な

一瞬、頭が混乱する。

分かつてゐることは、今私は完全に串刺しにされてゐると言つことと、ダルが無事であること。そして…ディールが、敵であること。
「昔話をしようか。」

さらに深く剣をめり込ませながら、嬉々としてディールは話し始めた。

「私の悲鳴など、氣にも留めずに。」

「孤紅戦争の話の真実を教えてやるよ。神話じゃあ、孤高の神は分身を残して倒れ、紅玉の魔王は封印された、なんて事になつてゐるが、眞実はその逆さ。」

嫌な、予感がする。それと同時に何かを納得してゐる自分がいる。「つまり、魔王こそ分身を残して倒れ、神は逆に封印された…そういう事か。」

「そ。さつすがダル兄さん、飲み込みが早いねえ。」

くつくと笑いながら、いつもの口調でディールは話す。

「それで、『邪の複製』…なわけ、ね。」

「ん？何、ルフィイ姉さん。」

「つまりは……あなたが、『邪の複製』。魔王の、分身……てことでしょう？」

神託の文章の中に、ディールの存在はきちんと示されていたってわけだ。

ただし……私たちの、敵として。

「そんな……なら、初めに出会った時点で僕らを倒せばよかつたはずだ！」

「やだなあ、ダル兄さん。俺はこの剣を取り戻したかったんだよ。魔王としての力を増幅させるこの剣が、ね。」

「……言つと同時にずるり、と私の心臓から剣を引き抜く。

……それで、一回死亡、か。

咳込みつつ、私はディールの方を見る。

「……まあ、あんた達のことは嫌いじゃないから……一日あげる。決めてきてくれよ。俺と戦うか、否かを。もつとも……」

顔一面に邪悪な笑みを張り付かせ、ディールは宣言した。

「『どうせ』の世界、壊す気なんだけど。」

……覚えているのは、そこまでだった。

次に記憶しているのは、どこかの宿で心配そうに私を見ているダルの姿。

……どうやら、失血がひどすぎて氣を失つていたらしい。

「……ルフィイ、明日まだ時間がある。……ゆっくり考えるといい。それじゃ、と言つて、ダルは部屋から出て行つた。

……さて。私はどうしようかな……。

第9章・不死者と魔王の決戦

…「魔王の分身」に『えられた一晩という猶予は、あつと言つ間に過ぎていった。

相手が望むは世界の破滅。だけど人々は、何も知らずにいつもと同じ生活をはじめている。

正直、この世界がどうなるかと知つた事ではない。
魔王の力があれば、私を殺す…いや、消滅させる事も容易いだろう。

…だけど…今の私は…

「おはよう、ダル。」

「……ああ。」

「…朝から暗い。」

びすっと音を立ててダルの脳天にチョップが入った。それに対し、彼は恨みがましい目をしてこっちを見た。

「何するんだ！こんな時に…！」

「声が大きい。」

もう一度、同じようにチョップをきます。そして彼も、やつぱり同じような反応を返した。

「あのねえ…』『こんな時』つてどんな時？』

「そりや当然……」

「私、喧嘩の前つてもつと落ち着くべきだと思うのよね。」

朝食として頼んでおいたベーコンエッグをぱくつきながら、ダルに笑いかける。

「喧嘩つて…！」

「だつてそうでしょ？相手がただ単に『魔王の分身』つてだけで。「そんなにあつさり言える相手じゃないだろー君は消滅するかもしれないんだぞ！それとも…」

はた、と彼の動きが止まって顔色が変わる。何か、恐ろしい事で

も思いついたように。

「…それが願い…なのか？」

恐ろしげに、でもどこか悲しそうな顔で、ダルは呟くように問いかけた。

「奴に消滅させられることが、君の願いなのか！？」

「あのさ、私、『喧嘩の前』って言つたわよね？」

「あ、ああ。」

何を言おうとしているのか分かつていらないらしく、ダルはぽかんとした表情で私を見た。

「負けるつもりで喧嘩なんかしない。相手が誰であろうと、ね。」

につこり笑つて言つた私に、ダルは今度こそ呆然とした表情になつた。

私は私の信じた道を歩む。相手が魔王だろうが神だろうが関係ない。今、私がしたいこと。それは…

「相手が気に入らない。だから私は奴…紅玉の魔王の分身、デイー ルを倒すのよ。」

「勝てる…思つているのか？」

思考停止から抜け出したのか、いつもよりやや低い声で問い合わせてくるダル。

…」いつは…本当にもう…

「言つたはずよ。『負けるつもりで喧嘩はしない』って。勝算とか何とかは二の次。要は気の持ちよつよ。」

「だけど…」

「ああもう…」ちやーちやーうるさい！大体、魔王の食事…エネルギー源は生きとし生ける物の邪氣なんでしょう？だつたら明るく前向きに！邪氣ばり撒いて相手喜ばせてジーするの…」

だんつ、ぱきつと私はテーブルを叩いて言つた。それに対してものか、ダルは驚いたような表情になり、私の顔をまじまじと見つめた。

「ルフイ…」

「言つておくれど、私は傭兵。雇い主はあなた。あなたの命令に従うけど、首になつても奴を倒す気でいるわよ。それを踏まえた上で。あなたはどうするの？」

「僕は……」

「あなたが言つてた『ご神託』……」ヒヒで終わるつて……私を解雇するつて言つながら、『ご自由』。」

「いや、そうじゃなくて……」

しどろもどろになりながら、ダルは必死に言葉をつむぐ。が、言い訳なんて聞きたくない。私が聞きたいのは……

「来るの！？ 来ないの！？ どっち！？」

「い、行く。行くよ。それは決めていた事だ。だけど僕が言いたいのはその事じゃなくて……」

恐る恐る、ダルは私の手を指差して「こいつた。

「君のフォーク、皿を貫通してテーブルに刺さつてゐるけど……いいのか？」

「…………あ。」

…………いきなり、幸先悪いかも……

「……へえ、逃げずに来たのか。」

「まあね。」

ディールと名乗っていた男は、見下すような顔つきで私達に言い放つた。

魔王の分身ゆえの自身からか、私達といった時よりもかなり不遜な態度である。

「正直この世界がどうなるうと知った事じゃないんだけど、虚偽にされたままつて言つるのは気に入らないのよ。だから……」
ちやきつと剣を構え、私はディールに向かつて言い放つ。
「倒してあげるわ。私の全存在をかけて、ね。」

「じゃあ……終わりにしようか、この茶番劇を……」

ディールが吼える。同時に奴はまっすぐにダルに向かつた。

「まずは鬱陶しい蒼神官、貴様からだ！」

「だから、海神官だつて言つてるだろう！」

ちやつかり言い返しつつ、ダルはその錫杖でディールの一撃を防ぐ。が、攻撃を受け止めはしたものの、力の差から軽く後ろへと吹き飛ぶ。

「ふーん。意外と戦えるんだな。神官と思つて甘く見ていた。いつもはルフィイ姐さんに守つてもらつてただけだつたし。」

「甘く見るのは、ダルだけじゃないんじゃない！？」

亥ぐディールに、私は後ろから斬りかかる。

「不意打ちのつもりなら、もっと静かにやるものじゃねえ！？」

「別に、不意打ちにするつもりはないわよ！」

一撃をあつさりとかわされ、急いで次の攻撃を繰り出す。

そもそも声を上げたのは戦士としてのプライドと…相手の注意をこちらに引き寄せるため。ダルを倒されちゃ、ちょっと困る事になるのよね。

「前から思つてたけど、不死者は言えなかなかの体捌きだよな。不死者になる前はさぞかし有名な兵士だつたんだろう？」「

「一応、銀髪の悪魔、なんて呼ばれてたわね！不本意だけど…」

「…貴様が…！？」

一瞬、ディールの動きが止まつた。何故かは分からぬが、とにかく今がチャンス！

「ダル！ ブチかまして！」

叫ぶと同時に剣を遠くに放り投げる。

「何を…！」

私の行為の意図が読めず、はつきりと驚愕の表情を浮かべるディール。

だが次の瞬間！

「邪滅迅雷！」

ダルの声が響くと同時に、ディールの周囲に邪を滅する雷が放たれる。剣を投げたのはそのため。だって私の剣って魔劍なんだもん。

喰らつたら確実にぶち壊れるわよ。

無論、普通の人間でも、喰らえばかなりの火傷を負う。……實際、今私も火傷したし。不死者の回復力がなかつたら今頃地面と熱いキスしてゐる所だつたわよ。しかもダルの奴、ちゃつかり増幅かけやがつたわね！普通の人間なら1回死亡してゐるわよ！

「るぐおおおおおおおおつ」

ディール…魔王の分身が、呻く。おそらく予想もしてなかつた攻撃だつたのだろう。がくりとその場に膝をついた。

流石に邪を滅する雷なだけあつて私よりも効いているらしく、地に突つ伏したまま動かない。

「ルフィイ、止めを！」

「…つたく！無茶な要求してくれちゃつて！」

痺れの残る体を無理矢理動かし、今できる最高の速度で剣を回収、奴を斬り付ける！

「ぐうううをおをををおおおををををつ」

どの獣にも似ていなき咆哮をあげ、袈裟切りにされた傷に手を当てるディール。

「人間の分際で…この俺に膝をつかせるとは…」

「…うわまだ凄い元気だし！」

「だがまだっ！まだだっ！人間ごときに倒されたとあつては、本体の…紅玉の魔王の名折れ！」

……ディールが叫ぶと同時だつた。それまで「ディール」だつた者が、明らかに「ヒト」とは異なる姿に変貌していく。持つていた剣も、その身に吸収されていく。

「な…なんだ！？」

ダルが、その変貌に疑問を投げかける。だけど、それに答える事ができる者は…今、変貌している最中だ。

……化け物。

そんな言葉しか出でこない。人間より、1回りも2回りも大きい、

赤い鳥。

「…待たせた、な！」

呆然としているところを突かれ、気がつけば私の体は吹き飛ばされた勢いで木々をなぎ倒していた。

衝撃波…！？

「く…が…つ」

これで本日、2回目の「死亡」。一応回復するけど…何なの、今馬鹿力！衝撃だけでこんなのはて…とともに喰らったら回復に時間がかかるわよ！

「ルフイ、無事かつ…？」

「一応無事。…だけど、このままじゃ無事じゃなくなるかも。」

「…え？」

「言つてなかつた？不死者はね、短時間に人間が5回死ぬダメージを喰らうと、次の日の出まで行動不能…休眠状態に入るのよ。」

鳥の攻撃から逃げつつ言つた言葉に、ダルは走りつつも絶句していた。

「…事実なんだからしそうがないでしょ…？」

「早く言え！そういう事は！」

「言つて信じた？」

「信じていなのは君の方じやないか…？」

「私が、ダルを信じてない…？」

「…そうかもしない。信じてないから言わなかつたんだろう。だとしても…」

「この状態でおしゃべりとは、余裕だな。」

「…また来た！」

鳥の翼を何とか剣で受け止める。

「…なんで翼を受け止めただけで金属音がするのよー…まさかせつきの剣が、この翼になつてるんじや…！？」

「どうした？倒すんじやなかつたのか？」

魔王の嘲笑。どうやらまだ、私達を見下しているらしい。

「…倒すわよ。魔王の分身を倒せるとなると、この私…第4の魔王

と呼ばれている『銀髪の悪魔』しかいないでしょ！

もう一度剣を構えなおし、「魔王」を睨みつける。

勝算は……ほとんど無い。でも、「全く無い」訳じやない。一か

八かの賭けに出る！

ダッシュで相手の懷に入り込み、自分の剣を、心臓があるはずの場所に突き立てる。が、聞こえてきたのはぎいんと言つ金属音のみ。手ごたえの無さを感じ、私は慌てて剣を退く。

「無駄、だつたな。」

頭上から魔王の声が聞こえる。しかもちよつと笑つてやがるし。しかしまあ、そんな事は二つの羽攻撃を受け止めた時から承知していた事。本当の狙いは…

「その目！いただきよ！」

言つが早いが、私は鳥の目に向かつて剣を深々と突き立てる…。羽は剣を通さなかつた。体内に入らない限り、魔剣はただの剣と同じである。しかし逆に体内に入つたら、この剣は魔剣としての威力を遺憾なく發揮するということ。ならばどの生物でも鍛えようの無い目や口内には刺さるのではないか。そう思つてやってみたんだけど…

「見事に、刺さつてくれたみたいね！」

まるで私の考えがわかるかのように、刀身から黒い火花がバチバチと走り出す。

「ぎ…？が、ああああああつ！」

鳥が悲鳴を上げてのけぞる。私は振り落とされないよつに必死で剣を握りしめつつ、さらに深くまで突き立てる。

しかし相手も必死。翼で私の体を叩く。どうやらこの翼、一枚一枚が鋭利な刃物状になつてゐるらしい。私の体は叩かれるたびに血飛沫をあげる。

……ヤバイ、そろそろ3回目の死亡かも…

思ったその瞬間、手が離れた。同時に魔王の翼が私の喉笛を掻き切つた。

「しまつ…」

声を出したつもりだが、出てきたのは喉から溢れる血のみ。これで4回目の死亡、確定である。

もうこれ以上、ダメージ喰らえないじゃない！

思いながら落下に対するショックを整えながら思い…そして、見た。达尔が不敵な笑みを浮かべ、錫杖を振るう瞬間を。

「ファンタム・グレイド！」

声が響く。そして达尔の放った魔法が、私の剣に直撃、そのまま魔王の体内で炸裂した！魔王の、声にならない悲鳴が聞こえる。

……ああああああつ！私の剣！

「大丈夫か、ルフィー！？」

「取りあえず死亡4回。つていうか私の剣をどうじてくれるのよ…魔法なんかブチかましてくれちゃって！」

喉の傷はどうやらもう塞がつたらしく…やつぱり不死者の再生力つて怖いわ…

心配そうに見つめてくる达尔に対し、思わず怒鳴り返す私。いくら魔剣とは言え、あの剣、結構重宝してるのに！

「剣の事は心配ない。今使ったのは神聖魔法ではなく暗黒魔法…それも、あの魔剣が増幅するタイプの、な。」

「…あ、あんた…暗黒魔法も使えるって…」

暗黒魔法は悪魔などの邪の力を借りたもので、普通神官なんかは「汚れたもの」扱いして手出しなどしようとしてないし、文献を読む事すら禁じているらしい。そもそも普通の生活をしている分には神聖魔法だけで充分だし。

…なのに、こいつ…达尔は今、暗黒魔法を使った。それもかなり強力なものを。

「前に、覚えた事があつてね。僕は神聖魔法と暗黒魔法の両方を使えるんだ。」

「そういう事は、早く言いなさいよ…」

「切り札は最後まで取つておかなきゃ…僕の過去の経験則だけど。

「

达尔は勝ち誇つたような笑みと共にきつぱりと言い放ち、ぐつたりして動かない魔王の方を見る。

一方の私はにこやかに笑いかけて…

「ま、あれだけの攻撃を加えたんだし、流石にもう…」

大丈夫、と言いかけた時だった。达尔が私を突き飛ばしたのは。

「何する……の、よ。」

「何とか…5回目の死亡は…阻止できたか、な……」

そこにいたのは。

魔王の分身に心臓を刺し貫かれている、海神官だった。

最終章・將軍と神官の……

「ふん…邪魔しやがつて。」

ダルの心臓から剣…私の剣を引き抜きつつ、魔王の分身は吐き捨てるように呟いた。

支えを失った体は、その場に小さな音を立てて倒れこむ。

「人間の分際で。この俺をここまで追い詰めた事は誓めてやる。」

私に剣を返しつつ一步、奴は近付く。

私は剣を拾つて一步、奴に合わせて後に退く。

さつきの攻撃が効いているのだろう。奴の足取りは、ややおぼつかない。

「もう一撃喰らついたら、確実に消滅していた。」

すでに奴の体は、鳥ですらなくなっている。完全なる…ケモノ。片目はさつきの攻撃で潰れたままだし、体の内部からはブスブスと煙が上がっている。

…にも関わらず、私は奴を恐れている。威圧されている。

「しかし俺は魔王！人間如きに負けるなど、断じてありえない！」

ケモノが、吼える。同時に私の背に悪寒が走った。

…これは、何？

今まで相手にしてきたモノとは格が違う。

わかつていたつもりなのに、覚悟が足りな過ぎた…？

「もはや手加減や躊躇などしない！貴様といつ存在を、この世界から完全に消し去つてやるッ！」

ケモノがその腕を振り上げ、その図体からは想像もつかないようなスピードでその腕を振り下ろした。

…まだ死にたくない！

ぎいいいんつ

ギリギリのところで、私はその腕を受け止めていた。

「死にたかったんじゃなかつたのか？」

言つが早いが、魔王は空いているほうの手を振るい、再び攻撃を仕掛けてくる。しかしそれも予想済み。あつさりと剣を退き、大きく後ろへと跳ぶ。

「…負けるつもりはない。負けるわけにはいかない…。私は、自分がこうなった原因を知るまで、死にたくない！」

：私は、孤独に耐え切れなかつた。だから「死にたい」と思った。だけど今、なぜかはわからないけれど…心の底から、「死にたくない」と思つてゐる。

こうなつた原因…誰が私を不死者にしたのかを、知りたいと思うようになった。それは、少なからずダルが影響してゐる。

恐怖より、今はダルを殺された怒りの方が上回つてゐるらしい。
：あの、変な神官の敵討ち、なんて私のガラじやがないんだけど…
「見せてあげるわ。……人間の底力つて奴を！」

ケモノの腕が再び襲い掛かる。が、その動きにはもう慣れただよいと身をかがめ、その体勢のまま一気にケモノに近付く。とは言え奴も流石にさつきの攻撃を意識してゐるのか、もう一方の腕で眼球はガードしてゐる。

「同じ攻撃など…」

ケモノの咆哮が周囲に響く。同時にその声は衝撃波となつて私を襲つた。こつちは思いもかけなかつた攻撃に軽く吹き飛ばされる。

：つだあああつ！これは流石に反則じやあ…？

着地しつつ、もう一度体勢を立て直す。ここまで厄介な手負いのケモノは初めてだわ！

「そもそも、貴様一人ではこの俺を倒す事はできん！先の攻撃には蒼神官がいたからな！」

「…ダルの魔法の援助があつた、て事は認めるけどね。」

「だろう！？魔法の使えない不死者一匹…殺せぬ俺ではない！」

嘲笑混じりに言う相手に対し、こつちは不敵な笑みを浮かべて剣を構えなおす。そして…

「ヘルゲートソード！」

「ン、と小さな音を立てて剣が振動し、淡く赤い光を放つ。

ヘルゲートソード…自分の武器に正でも邪でもない、「第3の力」

を蓄えて攻撃力を上げる「混沌魔法」の1つである。

和が魔洋を仕合なし
かんて言ふ力がしら

ケモの驚き顔は、ヤヤ勝ち誇ったよしは言ひ和

…たか
奴の驚きの矛先は
「私が魔法を使^二た事^一」ではなか^二
た^一し^二。

「人間が…ただの人間がなぜその力を使う事ができる！？」

毎日、水口魚が横手一筋の面に

混沌魔法には「正」も「邪」も関係ない。ただ自らの魔を殲滅するためだけに作られた、ある意味最も凶悪な魔法である。ただ、この魔法の弱点は……使用する際、かなりの力を消耗する事。少なくとも、私はそう思っているんだけど……

「人間が…いや、俺ら魔王と呼ばれる者や神ですらも、その力を引き出す事など不可能だつて言うのに！」

「隙だらけよ、魔王の分身！」

声をあげ、相手の懷に入る。そこでやつと正気に返ったのか、奴は私の剣から逃れようとしたが……一瞬、間に合わなかつた。

右肩から左脚までざぶぐりと、ケモノは大きな傷を負う。一方の私は剣を振り下ろした反動を利用して、もう一撃、今度は横一文字に斬つた。

傷口を押さえ、ケモノが悲鳴を上げる。だけど…まだ終わっていない

ない！それはわかっているがしかし…体が、動かない。既に4回も死亡するダメージを喰らつている上、反動の大きい混沌魔法なんて使つたせいか、立つ事もできない程、体に力が入らない。

「許さん！ 貴様…許さんぞ、不死者アアアアアつ」

ぼろぼろとその体を崩しながら、ケモノは動けなくなつた私に最

期の一撃を繰り出してきた。

「貴様も…道連れだあああつー俺と共に消滅するがいいイイイイイイイイ

もうダメだ

「そう思つた刹那だつた。やたらと聞き覚えのある声がしたのは、
『消えるんな、お前だナや。』『魔王の分身』。」

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନ୍ତିରି ପରିଷଦ୍ୟ

予想外に軽い音と共に、ケモノの体から一本の棒が生えた。どう見ても、ただの木の棒なのに、それは確かに、ケモノの体を貫通していた。

ケモノか私が……どちらが発した言葉だったのかはもう定かではな
い。

た。今度こそ本当に、紅玉の魔王の分身は、黒い靄と化して、消滅し

それは魔王の分身としては、あまりにもあつけな過ぎる最期だった。

「無事か？ルフィ。」

その靄のあとから出てきたのは、青い髪に青い瞳、女の私でも美しいと思つてしまつ程に美しい顔をした、神官だつた。

「でも… まだか君が魔法を使えるとは思ってへんかったなあ…。」

神官は和は右手を差し出
した。

「どないしたん？そんな狐につままれたような顔して。」

「ん？ ああ、ひょっとしてIJの喋り方か？ 気イ高なると、 IJの言葉
になんねん。

堪忍な、といつもと違うアクセントで話しだす神官を、私はいま

「何で？」
たゞ然としました

「ん？」

「何であなたが生きてるのよ…ダル。」

「何でつて…？」

心底不思議そうな表情を作り、神官…ダルは私の顔をのぞきこんだ。

「だつて、心臓を刺されてたじやない！」

「ああ、それで『一回死亡』やな。」

法衣の穴の開いているところを押さえつつ、彼はにこりと笑いかける。

……まさか…ここつ…

「今まで黙つとつたけど、僕も不死者やねん。」

「な…つ…？」

「前に言つたやん？『案外見た日よりも年を取つてる』つて。」「ここにこ笑いながら、あつさつととんでもない事を、この馬鹿神官はのたまつた。

「でもまあ、これで一件落着、だな。」

あ、話し方元に戻つた。

「そう…ね。……疲れたあ…。」

呟くと同時に、私の意識は闇へと墮ちた…。

どうやら知らないうちに、5回死亡のダメージを受けていたらしい…。

「本当にいいのか？今回の報酬。」

あれから3日経つて、私の体もすっかりよくなつた。

…まあ、不死者の再生力をもつてしても3日かかるつてあたり、どうかと思つけど。

次の旅に出るべく、仕度を整えていた時にダルは心底意外そうに聞いてきた。

「うん…誰が私をこんな体にしたのか、知りたくなつたし。時間は、いくらもあるしね。」

「こり笑つて答える。それを聞いて、ダルはほんの少し、寂しそうに笑つた。思えば彼も、悠久の時をすごす事になる存在なのだ。」

「私は旅に戻るけど、あなたはどうするの？」

「僕は……」

言葉にするのを躊躇つているような彼に、別の問い合わせる。

「ダル。自分を不死者にした奴の事、知りたくない？」

意味ありげな笑みを浮かべ、私は戸惑う海神宮に更に問う。

「……一緒に、旅しない？ 独りは何かと面倒で。でも、2人なら色々楽しめそうじゃない？」

「……いいのか？ 僕が一緒にいても。」

おずおずと問いかけてくる彼に対し、満面の笑みを浮かべて答える。

「ダメなら誘わないわよ。って言つたが、あなたが先に言つたのよ？」

『自分と一緒にいなか』って。

「……」どうやら、ダルの顔に初めて会つた時のよつな笑みが浮んだ。

「それじゃあ、今からは雇い主とかじやなくて仲間つて事で。…改めてよろしくね、ダル＝プリース。」

「……ああ。こちらこそよろしく、ルフィ＝ジエネル。」

互いに一礼しあい…その宿を出た。

私は…私達はもう、独りじゃない。

時の流れから置いていかれた私達を、何が待ち受けているかは知らないけど…何であるうとぶちのめすのみ！魔王の分身すらも倒した私達だもの。まあ大抵の事は乗り切れる…ハズ！

私とダルの旅はまだ続くけど…それはまた、別の機会つて事で！

最終章・將軍と神官の…（後書き）

これにて、「General and Priest」の最初の話である「銀髪の悪魔」は終了です。

ご要望があれば今後の話も書いて行きたいと思つています。

それでは、ここまで読んでくださった皆様方、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977a/>

銀髪の悪魔

2010年10月8日13時52分発行